


第33回 チクゴスズメノヒエ

カコちゅん
ジョウくん かほくがたナルドレン 

by Hito



チクゴスズメノヒエというきわめて日本的な名前を持つ北米原産のこの植物は、田んぼや水路に蔓延るため、やっかいな外来植物ということになっています。河北潟では最近定着した新しい”仲間”です。

1995年の調査で最初に確認されたときは、河北潟の湖岸の名残である西部承水路にわずかに見られました。当時は、侵略的外来種などという言葉もあまり使われておらず、この外来植物の侵入に対してそれほどの警戒をしていませんでした。しかし、2002年に調査を行った際には、西部承水路の下流域の水面を全て覆い尽くすほどの群落に成長していました。この事態にやっと河北潟でも侵略的外来種の対策が急務との認識に至りました。この年には、南米原産のホテイアオイも大量発生して、河北潟の生態系と生物多様性の保全の取り組みに新しいアプローチが必要となったことを実感した年となりました。

その後、2003年に津幡町潟端のアサザビオトープにおいて、石川県やNPO、企業が協働して、この植物を対象とした除去活動を行いました。2005年からは河北潟湖沼研究所により、希少植物の群落を保全する目的で、河北潟周辺の全域の対象とした除去活動が開始されました。2008年からは河北潟地区外来植物対応方策検討会が発足して、主に農業用水路の保全の目的で、毎年100名規模の活動が実施されています。

河北潟地域では、生態系に配慮した方法として手作業による除去活動を続けてきましたが、その成果が最近になっ

て現れてきており、西部承水路では、この植物がほぼ消滅しています。その他の水路でも、除去活動が功を奏して、現代では希少となったアサザ群落が復活するなどの成果も出ています。

チクゴスズメノヒエは富栄養化した水に出会うと爆発的に増殖しますが、本来は陸生の植物です。水面で群落を作る際にも、最初は陸の根掛かりを頼りに、土壌に根を生やした群落が水面に伸びて、水中に根を伸ばすようになります。水のないところでは、畦や乾いた田んぼを匍匐して生育範囲を拡大していきます。

河北潟では、干拓地の中央幹線排水路など、水際にコンクリートマットが施されていて、コンクリート乗り越えて増える水陸両用の本種でないとい生育できない水路もあります。こうした場所では、繁茂と刈り取りを繰り返すことで水辺の植生が保たれているという現実もあり、河北潟の仲間として役立っているとも考えられます。(文 高橋 久)